

文化財だより

第 15 号

平成14年 3月

発行 真鶴町教育委員会

特集 真鶴 祭り考

民俗芸能は自然の花

ドツカと大地に根を据え

真鶴・岩の人ひとヒトの

息吹きを浴び

郷土に育った野の花

それが

船祭り、山の神、道祖神

石に生き、漁に生き、

農に生きた人々の

温かな手によつて

受け継がれた営み

季節の折り目、折り目に

生命の安息を祈り、

労働、生産、豊穰に

感謝を捧げた

祖父、祖母、曾祖母の

汗と涙の結晶

今回の『文化財だより』では、土地に伝わる民俗芸能（祭り）と、石材業、漁・農業にたずさわってきた人々の心の願いと結びつきに焦点を当てて考察してみました。

真鶴の民俗（郷土）芸能も、他地域のそれと同様、住民の暮らしの中に根を下ろしてきたのは、祭りにおこなう芸能が集落の大切な伝統行事であるという共通理解のもとに、地域集団、職業集団、青少年集団（若衆）のそれぞれが役割を分担し、その伝統につとめてきたからではないでしょうか。

また、相模の海と伊豆の海にはさまれ自然災害の恐れを感じつつ、峻険な地形からの身の危険せまる採石、板子一枚下は地獄の海運、漁労。……年中汗水流して働く人々に与えられた唯一の楽しみは、老いも若きも、村中総出演の行事、祭りだったからとも言えると思います。

湯本委員には、真鶴の港を舞台に唄い継がれた歌、今は、聞かれぬ「御船歌」の数々を真鶴の背景、生活圏とそこに生きた人たちの様子などを。

川ノ邊委員には、貴船祭りの「神輿巡行道」と村民の「宮参りの道」

を度重なる災害と道路網、高度成長をとげたまちの発展とのかかわりの今昔を。

櫻井委員には、岩地区に伝えられている子ども中心の「ドンド焼」を、子どもを守る神様（道祖神）、子どもの願いを聞く神様、楽しい正月を導いた神のお帰りの行事の今と昔を執筆していただきました。

歴史の中で培われてきた真鶴気質と民俗（郷土）芸能の一端に触れ、発展伝承する文化に思いを馳せて頂ければと思います。

目次

特集 真鶴 祭り考

真鶴町教育委員会 …… 1

「貴船祭り」と船歌 …… 2

文化財審議委員 湯本 満

「神輿渡御、巡行道と宮参りの道」 …… 4

文化財審議委員 川ノ邊 昭治

「岩のお祭りードンド焼」 …… 6

文化財審議委員 櫻井 武

平成十三年度文化財保護事業 …… 8

貴船祭と船歌

文化財審議委員

湯本

満

毎年七月二十七、八日に行われる真鶴町貴船神社祭「貴船祭り」は、全国に伝わる船祭りのうち、関東地方における典型的なものとして、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。船祭は神体の依代、神輿を船に乗せて海や川を渡り、渡航安全、豊漁、豊作などを祈願する祭礼です。

〈御船歌〉は祭礼歌

船祭に付きもののなのが船歌ですが、船歌は大きく三つに分類されます。一つは儀式歌・祭礼歌（祝い歌、御船歌等）、一つは労作歌（船曳き歌、櫓こぎ歌、綱引き歌、船下ろし歌等）、そしてもう一つは娯楽歌（民謡等）とに分かれます。

その中で船霊社の祭典、船の新造、豊漁祈願、村の婚礼時などに歌われる祭礼歌・儀式歌は御船歌と呼ばれ、興まかせに歌う俗謡とは肌の異なる厳粛味と儀礼性をもち、様式化した唱法（群唱）と習練を積んだ歌い手（若衆組）によって、古くか

ら歌い継がれてきたものです。したがって御船歌の多くは土地の船霊社と一体のもので、貴船祭りは〈黄帝・四季の歌・鹿島歌〉の三つが歌われます（以下、御船歌を単に「船歌」と言います）。

土地に付いた船歌

船歌は土地に結びついたものと申しましたが、その土地だけに歌われるというわけではなく、同種の歌は全国的に見られます。ただ、歌詞は同じではなく地方によって転訛や言い換えがあり、どれが原型か定ったものではありません。ですから土地それぞれに、例えば〈真鶴・黄帝〉

〈真鶴・四季〉〈真鶴・鹿島〉などと呼ぶのが適切かも知れません。

ところで、黄帝・四季・鹿島を貴船祭りの船歌の題名としてご存じでも、歌詞や詠唱をしみじみとご覧またはお聞きになった方は少ないのではないのでしょうか。実際、読んでも聞いてもわかりにくいのです。〈黄帝〉の出だしは

”ヤンレ目出度いな、天の岩戸の
明け暮れに……………”

と書かれますが、耳で聞きますと非常にスローテンポで、音声が文節にまとまらないので、歌詞の意味を理解するのが困難です。こうしたことが、せっかくの由緒ある歌を、一般にはなじみ薄いものになっている原因の一つと言えまじょうか。

船歌の元祖〈黄帝〉

また、船歌には祝い歌が多いとも申しましたが、〈黄帝〉の由来から見てみましょう。

黄帝は、中国の古書『史記』に見える伝説で、文武両道に秀で舟や車の創案者とされる帝王の称号です。その故事が鎌倉時代末からわが国では謡曲にとり入れられ、〈船造りの始祖〉と語られますが、戦国・江戸

時代になると、幕藩用船の新造祝儀歌〈黄帝〉がつくられ、船歌の元祖として歌われるようになりました。

このことは、〈黄帝〉を頂点とする船歌——封建権勢の水軍を統率鼓舞する儀式歌が、海村の船祭とも無関係ではないことを思わせます。

事実、中近世の豆相一円の浦々は、小田原北条氏や徳川幕藩の水軍基地として御船手衆（軍船水夫）の養成地でもありました。御船手衆を仰せつかった若者たちは、平生は漁労に従事し、海難救助や氏神社の祭典要員として働く一方、御船手衆としての心意気と誇りをもって、船歌の伝承につとめてきたことでしょ



う。船祭と船歌、船歌と若衆組とは、こうした関係で結ばれてきたのだ。

〈四季〉も船歌

〈真鶴・四季〉の歌詞は短く文意も平明です。

春は京都に花咲いて

つつじ椿で目があかぬ

夏は涼しき卯の花に

雲や霞で目があかぬ

秋は竜田のもみじ葉に

萩やすきで目があかぬ

冬は笹葉に雪降りて

雨やあられで目があかぬ

（※流水に散り浮く「竜田模様」

四季の風光を読み連ねたものがどうして船歌なのか、疑問に思われるでしょうが、諸方の「船歌」「祝儀歌」として残されています。歌詞には長短多種あり、〈真鶴・四季〉は最短の部類です。

〈鹿島〉は弥勒踊歌

〈鹿島〉は歌と踊りが組み合わさっていますから、どちらを主体に考えるかによって、解釈にも違いが出ます。

踊りとしての〈鹿島〉は、豆相沿岸の小田原から東伊豆町までに伝わ

る神事舞踊とされていますが、この地域に限ったものでもなさそうです。鹿島信仰による鹿島踊と念仏踊系の弥勒踊とが習合した民俗芸能として、古くから各地に流布するものだからです。

唄としての〈鹿島〉は、「幕府船歌集」や「〇〇藩船歌集」の中にも見えますから、これも全国的に歌われたと思われます。

鹿島踊の唄を組み入れて作られた〈くどき唄〉を〈鹿島くどき〉といいます。道中歌の一種で、「われは〈くどき〉の者なるが」といった口調ではじまり、「くどき」の浦に着きにける」で終わるのが一般の詞型ですが、〈真鶴・鹿島〉は

千早ふる神々のいさめなれば

弥勒踊りめでたい

誠やら真鶴港へ

弥勒御船が着いたとや

艦船には伊勢と春日の

中は鹿島の御社

（略）

鹿島では稚児が踊る

護摩堂では護摩を焚く

その護摩は二度焚き候

二本つづきと護摩を焚く

（略）

天竺の雲の間で

十五御姫が米を撒く

その米は二度撒き候

二本つづきと米を撒く

で、〈くどき〉型ではない〈弥勒踊り唄〉であることがわかります。

〈くどき・くどき〉は、本来詠嘆詞で何度もくり返して説得するといった意味の和語ですが、ここで言う〈くどき〉は邦楽用語の〈口説〉——叙述を長々とくり返す詞章のことで「汽笛一声新橋を……」で知られる鉄道唱歌のように、叙事的な七七または七五調が多く、中世から近世にかけて出現した万歳、船唄、



朗々と響く唄上げの声

木遣り唄など長編の歌詞を、〈万歳くどき・船唄くどき・木遣くどき〉などと呼ぶようになりました。

地元から消えた船歌

ところで皆さんは〈真鶴くどき〉という曲名の船歌があるのをご存じでしょうか。これが不思議といえませんが、この真鶴地域では歌われておらず、千葉県館山と神奈川県三浦それに静岡県伊東の三地域だけに伝存するという、地元にとつていはば「幻の歌」なのです。

さてそこで、「真鶴」の名を冠しながら地元伝承されていないのは不思議というわけですが、船歌の元祖である〈黄帝〉が伝承されている地域には、かならずほかの船歌もあるという通説にしたがえば、真鶴にも〈真鶴くどき〉があつてしかるべきと思えるのに、それがないところをみると、当初存在したものが、なにかの理由ですたれてしまったのでしょうか。船歌の強固な伝承性からして、それが簡単に消滅したとは考えにくいことです。

歴史を語る 〈真鶴くどき〉

私が〈真鶴くどき〉に執着するわけは、ほかにもあります。それがこ

の地域の歴史的背景と密接な関連をもったものだからです。といって地元にはない歌なので、前記三市のうちから館山市のものを借りて、要所を披露しますと、

ヤアンレ、旅人よ聞きやれ

今度のお江戸の御晋請に

諸国大名がエ、集まりて

伊豆の網代にお着きある

貴賤の人はかず知れず

山山谷谷大石の、ここが手柄の

ことなれば、エン、エン

われ劣らじと曳きにける

中にもとりわけ、木遣りと申す

よう面白や、声かけ汐をかけ

先き綱は、サアエンヤ

この、熱海にさしかかる



ゆんべ寝て思う、眺むれば
渚の諸船あまたの名所やア
エン、真鶴宿になりぬれば
そなた寄れやと 棲を引く

(後略)

読み込まれている地名は、真鶴の
ほか網代、熱海、藤沢、品川。

冒頭「今度のお江戸の御晋請に」とあるのは、寛永年間（一六三五）徳川氏から江戸城造成工事を請負わされた全国諸大名が、伊豆一円の石山で採石作業に当たり、三千艘の石材運送船が伊豆と江戸とを行き来し、とりわけ徳川御三家や大藩の石場が集中した真鶴周辺は賑わいを見せたという時代背景を描いたもので、この船歌の成立が江戸初期であることを物語っています。

残したい《郷土の船歌》

三浦や伊東の「真鶴くどき」にもそれぞれ真鶴ゆかりの名所や伝聞が歌われてあり、土地に伝承されていないという理由でこれを見捨ててしまつては、永久に地域とは無縁のものになってしまうようで、残念でなりません。そこでこれらを町の《歴史・民俗資料》として残すことはできないものかと思う次第です。



磯浜だった貴船神社前

神輿渡御、巡行道と宮参りの道

文化財審議委員

川ノ邊 昭 治

神輿渡御の由来

寛文十二年（一六七二）の『相州西郡西筋真鶴村書上ヶ帳』の中に、「……靈験新なる事数度御座候ニ付而舟中之祈禱ニ神腰（輿）造立致、廿弍年以前卯ノ年（慶安四年）より三年ニ一度宛御腰村中御供仕祭渡し申し候……」と書かれています。

これを現代調で言えば「……靈験あらたかな事が数度も起きましたの

で、航海の安全や大漁祈願の祈禱に神輿をつくり、二十二年前の卯の年より三年に一度ずつ、村内で神輿のお供をして海を渡ることになった」となります。そして、この文から海上渡御、舟祈禱と村内巡行の二つが読み取れると思います。

神輿の海上渡御は、現在よりも質素だったと思いますが、この時原形が作られ、以降江戸文化の流入と共に華やかさを増して来たと考えられます。

村内巡行の道順

さて、神輿村内巡行ですが、古い記録がなく正確には分かりませんが、中路修平氏（元文化財審議委員）の聞き書きメモの中に、富岡寿夫氏ほかの方々の談として、「昭和十年だったと思う。東西の小早船が揃い古式豊かな大祭が行われ、盛大な『鉢洗い』の行事が開催されました。その時、大先輩の古老から聞いたことを覚えて……」で始まり、「船祭りの由来や形式などについては、江戸時代の大名が行った船遊びや新造船の進水式などをモデルにして整えられて来た」とか、船歌「黄帝」、小早船の上げ下ろし、權伝馬競漕、

鹿島踊り、……今は見られぬ獅子舞……数々の話を伝えていきます。しかし、神輿村内渡御、巡行コースについては触れられていません。

『例祭御輿渡御式次第書』（昭和十五年四月、郷社貴船神社、真鶴町青年団・戸主会・区長会発行）によりますと、旧六月十五日（本祭当日）早朝「キリギリス籠」を組み立て、東部は仮殿横、西部は旧西本払に置く。から始められ「摺合」の挨拶、仮殿発興祭、鹿島踊り、東部の囃子打込みと進み、神輿町内渡御となります。

渡御の順序は、花山車・鹿島踊り・真榊・神輿・西部東部の囃子・供奉員（お供行列）となります。

神輿町内巡行は、仮殿を出発し西本払で休憩の後、西仲町を北上します。ひところは、旧青木宝作氏敷地（青木理容店南駐車場西南隅）に一對の獅子頭が飾られていたとも言われています。

神輿は、大店前で休憩しますが、鹿島は魚喜代角で踊り、花山車に続き直進して県道へ出ます。しかし、神輿は魚喜代角を左折して、西の坂前から西之神（西の道祖神）を経

て、横捲、椎の木（ひのや旅館前）へ進み、駿河銀行（大正庵駐車場）角を右折し魚喜代角に戻り右折、鹿島連へと続きます。また、魚喜代前の西仲町で待機していた囃子連は、西を一周した神輿に続きます。

祭りの行列は、県道を西進して真鶴駅広場に向い休憩、ここで中食の時間となります。



駅前のお旅所では、出発前に発興の式を行います。花山車・鹿島の若衆は先行出発し、県道を下り役場前（コミュニティ真鶴）へ進めて来ます。

ここから、花山車と鹿島連は、宿中へ下りますが、神輿は丸山まで進

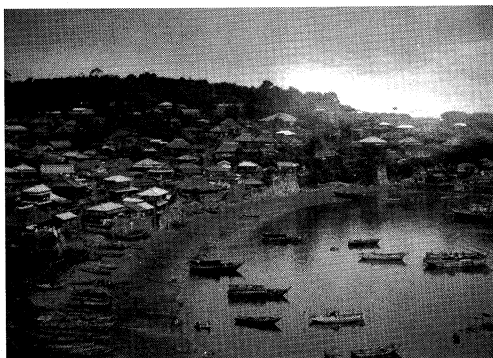
み直ちに役場前に戻り、囃子（キリギリス籠）を従えて宿中へ下ります。宿中、五味安太郎氏宅前（魚伝前）で神輿は休憩した後、仮殿へ下り入御します。

古老の話では、「震災・火災や時代の変り変わりで、町並み（道路網）が変化して来たので、神輿の町内渡御の道順にも多少その時代時代で変更があったと思う」とのことでした。

宮参りの道

次に、村里から離れた貴船神社への「宮参りの道」ですが、大正十一年、国鉄熱海線真鶴駅まで開通記念の時発行されました『真鶴村案内』（内務省御届済）の道路図や鉄道開通記念帳（写真集）、また、大正時代の写真家が撮らえた『昨日の道、去年の坂』（桜木達夫編著）から真鶴海岸や集落の実景・様子がうかがえます。

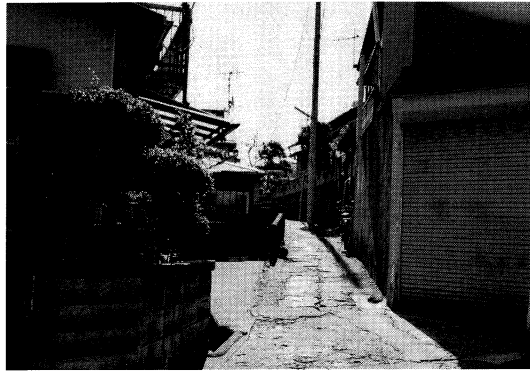
また、戸数八二二の真鶴村の大半が焼失損壊をこうむった大正十二年の関東大震災、昭和二年に始まり同九年に完成をみた真鶴漁港修築事業、またこの間、昭和五年北伊豆（豆相）地震で損壊を受けた町内道路の復旧工事などの記録資料をふまえ、古老の話を総合してみますと、



砂浜だった頃の真鶴港

「真鶴海岸は砂浜で、子どもの頃俺たちも泳いだよ」と言いながら「確か当時は、現在の入船旅館からケイアイの手前ぐらいまで砂浜だった」とか「今は海の面影を見ることが出来ないが、栄寿司の石垣は磯崎の水源地方向へ連なっていたし、一方山側は梅原水産自宅（ランプ屋）の石垣から西仲通り『かくせい丸』青木さんへ連なり、その前は砂浜だった」「ひとは良く製氷所、製氷所と言うが、小浜と言って磯遊びの出来た所でそれから先は断崖絶壁だったな。勿論、鵜の窟もそうだった」そして、「崖の上から小浜に下る杣道は、あったが、本当に細い獣道だっ

たが登れば宮参りの道につながって
いたよ」「宮参りと言えば、船で行
くか、西の坂から崖上の道を歩くか
の二つの方法だけだった」などと話
してくれました。



間の道に入ります。途中で切れます
が、青木さんの海側添いの崖縁を通
ったと思われます。急斜面の字海岸
の崖上を通り、金川水産の真上にあ
る別荘の西側に柚道の様になってい
る、現在あまり使用されない道へ
出ます。そして、ペンションアルハ
ンブラと松村さんの間を左折して、切
り立った崖上の道を通り、一倉神社
の石段を下った道と考えられます。

貴船神社の「船祭り」を仕切った
当時の青年団（若衆組）は、金棒を
鳴らしながら夜回り（夜警）や沖網
定置漁場の錘り（土のう）作り、道
路の道普請など現在のボランティア
的な仕事もしたようです。

次に、大正十一年の『真鶴村案内
図』と『公図台帳』とを重ね合わせ
て「宮参りの道」を見てまいります。
現在の愛宕神社脇の坂道は、尻掛
へ抜ける道で、真鶴九八六清節庵と
真鶴一四〇一ガーデンコートの間の
石段を登り直進して半島公園線を横
断し尻掛へと通じていたようです。

「宮参りの道」は、西の坂の石段
を登らず、田中さんと佐々木さんの

便利になった現在の真鶴の道路網
からは、昭和初期の様子を推測する
ことは困難なこととは思いますが、
当時の人々の思いや、苦勞苦心を偲
んでください。

岩のお祭り——ドンド焼

文化財審議委員

櫻井

武

真鶴町岩地区では、一月に小正月
行事であるドンド焼、七月下旬に地
区の鎮守である兒子神社の例祭が行
われています。冬と夏、深い谷に囲
まれたこの静かな入り江の集落が、
昔から引き継がれてきたお祭りによ
つてにぎわいます。地域のお祭りに
は、どのような意義があるのでしょ
うか？その歴史をふり返りながら、
あらためて考えてみることにしまし
よう。今回は小正月行事であるドン
ド焼についてです。

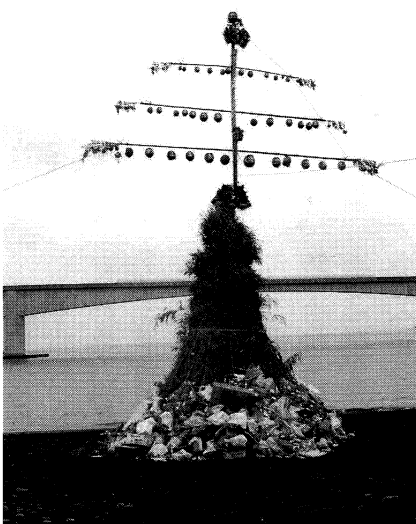
現在のドンド焼

現在のドンド焼は、岩地区の子ど

も会、さらに近年真鶴丸山地区の皆
さんも加わって、正月十五日近くの
休日に、岩海岸で行なわれています。
まず一週間ほど前に、子ども会の
担当地区の育成者が中心になって
「ヤグラ」を立てます。

岩海岸に、上部にダルマなどを使
って飾り付けをした太い竹の柱を立
て、周囲を笹で円錐状に覆い、縄で
縛った小屋のようなものを作りま
す。ここに正月に各家庭で供えら
れ、各地区の道祖神の前に集められ
ていた正月飾りを持ち寄ります。

数え十二歳、小学五年生の男の子
たちが火付け役となって燃やします。
空高く燃え上がる火柱にあたり、三
つ又の木に刺した餅花（紅白の餅団
子などをさしたものを焼いて食べ、



岩海岸に立てられた「ヤグラ」

この一年の無病息災を祈ります。

岩地区のドンド焼は、高さ十メートルを越え、周辺地域では一番大きなものとして知られます。一時中断しましたが、昭和五十三年から復活し、地区の子ども会を中心に運営されています。これが現在のドンド焼祭りのあらましです。

このお祭りにはどのようないわれや意味があるのでしょうか。

昔のドンド焼

では、昔のドンド焼祭りがどんなものだったのかをふり返って見ることにしましょう。郷土誌『まなづる』、『岩の子われら―まなびや百年』岩小PTA、『神奈川県道祖神調査報告書』(県文化財保護課)などに、戦前から昭和二十年代までの姿が紹介されています。これをもとに再現してみましよう。

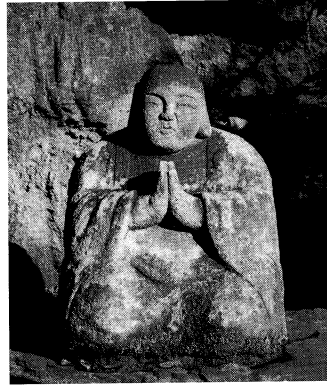
・元は旧暦一月十四、十五日に行われた。

・名称はドンド(またはドンドン)焼の他、サイト焼、オンベ焼ともいわれた。

・昭和初期は上、下、大下、細山の各集落の道祖神の前で、後に細山ののぞき海岸に立てられた。

・材料である竹や笹の切り出し、正月飾りの収集は子供達の仕事だった。柱立ても子供達でした。

・ドンド焼の材料は十二月中に用意した。正月になると、各町内で子供組の年長者の中からそれぞれ大将が決められ、その子を中心に準備が進められた。



細山の道祖神

・おんべ宿といって、子供達に準備の場を提供し、世話をする家が決められた。

・正月を過ぎると、ドンドの中などで太鼓の練習がはじまる。正月飾りを集め、どこが一番多く集めたかを競った。競争のあまり、互いにドンドの柱を切り合うこともあり、それを阻止しようと夜遅くまで見張り番をした。

・お供え餅の下に敷いた半紙をもらって裁断し、御幣のような「おん

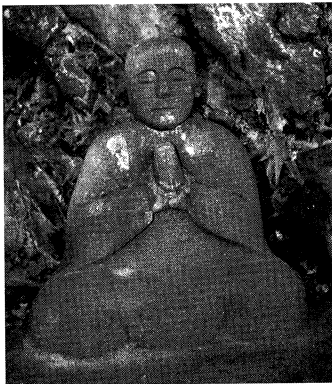
べ」と呼ばれるものを作った。山車を引き出し、その中心に飾った。これは十五日に太鼓を叩きながらひいて回った。

・十四日、各町内を回って祝儀や餅米をもらって集めた。その際、「ブリがたくさん取れるように」とか、各家庭が富むようにと祝いの言葉を述べた。夕方、ドンドに火を点け燃やした。団子を焼いて食べた。また、子供達はおんべ宿で夜通し遊んで過ごした。

以上が簡単な概略です。

ドンド焼行事とは？

ドンド焼が行われる「小正月」というのは、本来旧暦の十四、十五日(現在の二月下旬頃)。一年の最初の満月を迎える日のことです。新月の日である一月一日の大正月おおひに對し、小正月と呼ばれます。一月一日



下の道祖神

と同様、新しい年を迎える祝いの日となっています。「家々の正月」ともよばれ、古い日本の正月の姿をとどめていると指摘されます。

小正月行事は各地で様々な催しがありますが、多くの場合、道祖神と結びついています。そして、柱立て、火祭り、子供を主人公としたお祭りなどという点が多くに共通しています。

道祖神というのは、地域の境界線に置かれる神様で、病氣や災害などが地域の中に侵入しないよう防ぐ役割が期待されています。丸石を使う地域、男女が肩を組む石像を置く地域などがありますが、伊豆東海岸では、昔から「僧形丸彫り道祖神」と呼ばれる石像を祭ってきました。道祖神の役割は他に子供たちの守護神、子宝を授ける神、海山の豊穡を約束する神など、人々に様々な願いを期待される、一番身近な存在でもありました。

たとえば、友人に病氣の子が出ると、みなで道祖神の前に整列し、「南無、せいのおさん。○○さんの病氣が治るようにお願いします。」と声を張り上げ祈ったそうです。これは

道祖神が「子供の守護神」と信じられていたからです。

ドンド焼祭りの意義

岩・真鶴の小正月行事を振り返って、その意義を二点にまとめて考えてみます。

正月の行事として

まず、お祭りの核心のひとつは、柱を立て、そこに各家庭の正月飾りを集めて焼くことでした。それらは「年神」と呼ばれる、お正月の神様を招くための道具（＝ヨリシロ）です。正月に、お飾りを通して招き寄せ、ご馳走をして喜ばせた神様を、火で燃やし煙にして再び「空」へ帰すのです。そのことによって、この一年の幸せを約束してもらう行事だと考えられています。これは年をあらためる正月行事としての意義を持ちます。

子供の祭りとして

もうひとつ重要なことは、子供達がこのお祭りの主人公だということです。最大限、子供達の自主性に任され、悪戯や喧嘩も大目に見られる。むしろ、子供達本来のそうした自然な姿が尊重されるのです。それは子供達が神の代役（＝ヨリマシ）と考

えられていたからです。その潑刺^{はつらつ}とした姿を力として、各家庭や集落に活気を与え、この一年の幸いを約束するのです。お菓子やご馳走は、悪戯な神様のご機嫌を損ねないようにするための、お供えのようなものではないでしょうか。これは変装した子供達が



餅花を焼く人々

「Trick or Treat（お菓子をくれないと悪戯するぞ）」と唱えて各家庭を回る、アイルランドを起源に北米大陸に広まったハロウィーンとも通じるものがあります。あちらのお祭りも、古いケルト民族の年がわりの行事が元になっているそうです。

戦前、岩地区では、漁場を見下ろ

す位置にある道祖神の前に、漁船が出る頃を見計らって子供たちが整列し、「南無、せいの神さん、ブリがとれるように拝みます。頼みます。」と祈ったそうです。そしてご褒美にブリをもらい、魚商に売ってノートや鉛筆を買って分けたそうです。地域の経済を支えたブリの水揚げに、子供たちの力を借りていたのです。

祭りを伝えるということ

地域のお祭りというのは、その背後に、厳しい暮らしをみなが乗り切っていくという現実がありました。身近で病気の友が亡くなる姿を見て、一生懸命祈り、そして祭りを催したのだろうと考えられます。

現在は病気で亡くなる子もまれになり、モノも豊かになりました。それ故、道祖神に祈り、子供達が主体になってドンド焼をする必要もなくなったのかもしれませんが、しかし、豊かな現在であっても、モノの不足とは別の次元で、やはり子供達は様々な困難に出会います。私たちは次の世代にどんなお祭りの形が伝えられるでしょうかドンド焼祭りの意義を振り返ることで何かのヒントが見つければと願います。

平成三十三年文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

- ・文化財だより第十五号発行
- ・町民センター・民俗資料館展示事業
- 各施設で年間六回の企画展示を実施

◎文化財審議委員調査研究事業

- ・町内所在の石造物調査
- 真鶴全地区を対象に石造物の所在確認調査を実施
- ・調査研究事業

二月十九日、神奈川県立博物館及び三溪園を視察。文化財の保存と活用について調査研究を実施

◎文化財審議委員協力事業

教養講座「くすのきゼミ」に講師として協力

- ・「真鶴の石造物と江戸築城2」11/10

◎文化財指定古文書の複製事業

文化財の保護と活用を図るため、次の古文書の複製をしました。

「根府川村黒根沖根拵綱張立関係文書」
(古文書の四十)